

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成13年3月18日 9時20分～11時50分)

注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 大宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして
 101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。
 良い解答の例…… (濃くマークすること。)
 悪い解答の例…… (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1間に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 30歳の初産婦。妊娠中の異常は指摘されていない。分娩第2期は30分で経過し、3,050gの女児を経腔分娩した。胎盤は自然剥離して5分後に娩出され欠損はない。腔内から新鮮な血液が20分で900g流出した。疼痛はなく顔色は蒼白である。脈拍90/分、整。血圧96/64mmHg。子宮底は臍下5cmで体部の収縮は良好である。

考えられるのはどれか。

- (1) 弛緩出血
 - (2) 子宮内反症
 - (3) 胎盤遺残
 - (4) 頸管裂傷
 - (5) 膜壁裂傷
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

2 出生体重3,560gの新生児。爪は長い。分娩時羊水量は少なく、臍帶と羊膜とは黄染していた。

考えられるのはどれか。

- a 急性胎児仮死
- b 妊娠中毒症
- c 子宮内発育遅延
- d 前期破水
- e 過期産

3 生後4週の新生児。正期産、体重3,025gで出生した。黄疸が続いているために来院した。全身状態は良好で機嫌も良く、母乳の飲みも良い。便は生後1週ころから粘土状で白っぽい。腹部はやや膨隆し、右肋骨弓下に肝を2cm触知する。血液所見：赤血球370万、Hb 12.3g/dl、Ht 38%、白血球11,000。血清生化学所見：総ビリルビン8.5mg/dl、直接ビリルビン5.6mg/dl、GOT 110単位(基準40以下)、GPT 90単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ980単位(基準320～1,140)。

まず行うべき検査はどれか。

- a Coombs試験
- b 血清TSH測定
- c 血中ガラクトース測定
- d 十二指腸バンデによる胆汁採取
- e 便潜血反応

4 36歳の男性。けいれん発作のために救急車で搬送された。診察時けいれんはないが全身の著明な振戦を認める。記銘力と見当識とが著しく障害されている。家族からの情報により、現在医師から処方されている炭酸リチウムを、約10時間前に大量に服用したことが判明した。1か月前から悲観的になり、自殺の目的で服用したと推定された。

最も適切な処置はどれか。

- a クロルプロマジン筋注
- b フェニトイン静注
- c 高張食塩水輸液
- d 胃洗浄
- e 血液浄化法

5 48歳の男性。倦怠感、日中の眠気および不眠を訴えて来院した。6か月前から時々全身倦怠感とふらつきとを自覚していた。最近日中の眠気が強く、夜間頻回に覚醒するようになった。身長166cm、体重80kg。血圧160/94mmHg。血清生化学検査では異常を認めない。

診断のために最も有用なのはどれか。

- a 安静時脳波
- b 終夜睡眠ポリグラフィ
- c 頭部CT
- d 動脈血ガス分析
- e HLA検査

6 9歳の男児。異常な行動のため来院した。1年3か月前に転校した時からまばたきを頻繁にするようになり、1年前からは、更に頭を振ったり、肩をゆすったりするようになった。10か月前から「あー」、「ほー」などと意味のないことを言い、最近は「くそ」、「ばか」、「死ね」などと独り言を言うようになった。

適切な対応はどれか。

- a 転校を勧める。
- b 友人関係を聞き出す。
- c 異常行動を禁止する。
- d ジアゼパムを投与する。
- e ハロペリドールを投与する。

7 5歳の女児。急性骨髓性白血病で化学療法を受け、完全寛解に導入された。その後、兄からの骨髓移植が実施された。移植2週後、発熱、播種状紅斑および下痢・下血をきたすようになった。

最も考えられるのはどれか。

- a GVHD
- b 急性骨髓性白血病の増悪
- c 溶連菌感染症
- d アトピー性皮膚炎
- e アレルギー性紫斑病

8 4歳の男児。1歳ころから眼が時々内側に寄ることがあったが、最近になって増悪したので来院した。視力は右0.1(1.0×+4.00D)、左0.1(1.0×+5.50D)。眼球運動に異常はみられない。眼鏡非装用時(別冊No. 1A)と眼鏡装用時(別冊No. 1B)との眼位の写真を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 偽斜視
- b 内斜位
- c 先天内斜視
- d 調節性内斜視
- e 外転神経麻痺

別冊
No. 1 写真A、B

9 56歳の男性。昨日から右眼の視野異常を生じ来院した。1週前から右眼の飛蚊症と光視症とを自覚している。視力は右0.9(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。眼圧は右6mmHg、左15mmHg。右眼の眼底写真(別冊No. 2)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 網膜剥離
- b ぶどう膜炎
- c 加齢黄斑変性
- d 網膜静脈閉塞症
- e 閉塞隅角緑内障

別冊
No. 2 写真

10 51歳の女性。難聴と耳漏とを主訴に来院した。25年前から時々耳漏があったが放置していた。5、6年前から徐々に難聴が増強し、耳漏を繰り返すようになった。側頭骨エックス線単純写真で乳突洞の発育は抑制されているが、骨の破壊は認めない。右耳の鼓膜写真(別冊No. 3A)と聴力像(別冊No. 3B)とを別に示す。

この患者の治療で適切なのはどれか。

- a 鼓室換気チューブ留置術
- b 鼓室形成術
- c 中耳根治手術
- d アブミ骨手術
- e 人工内耳植え込み術

別冊
No. 3 写真A、図B

11 65歳の男性。数か月前から暗闇を歩くと体の動搖が激しく、歩行が困難となり来院した。目を閉じても体の動搖が著明であるが、明るい場所を歩く限り問題がない。30年前に肺結核のためにストレプトマイシンの投与を受けたことがあり、それ以降難聴となっている。

考えられる疾患はどれか。

- a Ménière病
- b 良性発作性頭位眩暈症
- c 前庭神経炎
- d 中毒性平衡障害
- e 動搖病



12 46歳の男性。右上頸部腫瘤を主訴に来院した。4か月前から右耳の閉塞感と難聴とを自覚したが放置していた。2か月前から鼻汁に少量の血液が混じるようになった。1か月前から右上頸部の腫瘤が増大した。頭蓋底単純CT(別冊No. 4A)と右耳の聴力像(別冊No. 4B)とを別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 難聴は蝸牛神経の圧迫によって生じる。
 - (2) サイトメガロウイルスの関与が考えられる。
 - (3) 進展すると頸静脈孔症候群をきたす。
 - (4) 組織学的には扁平上皮癌が多い。
 - (5) 放射線治療が有効である。
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 4 写真A、図B

13 36歳の男性。健康診断で胸部異常陰影を指摘されて精査のため来院した。自覚症状はなく、身体所見にも異常を認めない。胸部エックス線写真(別冊No. 5A)と左肺動脈造影写真(別冊No. 5B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 肺塞栓症
- b 肺癌
- c 気管支性囊胞
- d 肺分画症
- e 肺動脈瘤

別冊
No. 5 写真A、B

14 73歳の男性。1か月前から咳嗽と粘性喀痰があり来院した。呼吸困難はHugh-Jonesの分類Ⅲ度。30年間鉱山で働いた職歴がある。胸部エックス線写真(別冊No. 6)を別に示す。

この疾患で頻度の高い合併症はどれか。

- a 肺結核
- b 肺真菌症
- c 好酸球性肺炎
- d リポイド肺炎
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎

別冊
No. 6 写真

15 45歳の男性。1年前に嗄声が出現し、徐々に増悪したため来院した。痛みはなく、頸部リンパ節の腫脹もない。喫煙歴はない。喉頭直達鏡写真(別冊No. 7)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 声帯ポリープ
- b 声帯結節
- c ポリープ様声帯
- d 喉頭白板症
- e 喉頭乳頭腫

別冊
No. 7 写真

16 60歳の男性。咳嗽と労作時の呼吸困難とを訴えて来院した。20年間自動車部品製造業に従事した職歴がある。来院時の胸部エックス線写真(別冊No. 8A)と造影CT(別冊No. 8B)とを別に示す。入院後に胸腔穿刺により採取した胸水の細胞診は陰性で、ヒアルロン酸値が増加していた。

診断はどれか。

- a 膿胸
- b 胸囲膿瘍
- c 乳び胸
- d 肺癌
- e 胸膜中皮腫

別冊
No. 8 写真A、B

17 64歳の男性。半年前から突然に生じる動悸を時々自覚するため来院した。動悸は長い時には数時間続き、いきみや冷水に顔をつけることで消失することがある。約1か月前から動悸発作中に一過性の眼前暗黒感を伴うようになった。意識消失をきたしたことはない。脈拍65分/整。血圧132/76mmHg。安静時心電図は正常。長時間連続記録心電図(II誘導)(別冊No. 9)を別に示す。

この患者で正しいのはどれか。

- (1) 血栓塞栓症の危険がある。
- (2) 高カリウム血症を合併している。
- (3) キシロカイン静注が有効である。
- (4) カテーテル焼灼術<アブレーション>の適応である。
- (5) ペースメーカー植え込みの適応である。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 9 図

18 3歳の男児。3歳児健診で初めて心雜音を指摘され来院した。生来かぜをひきやすく、年に5、6回は急性咽頭炎として治療を受けていた。身長95cm、体重12kg。脈拍98/分、整。心臓の聴診で、第2肋間胸骨左縁を最強点とする2/6度の収縮期雜音を聴取し、Ⅱ音の固定性分裂を認める。他に特記すべき身体所見はない。胸部エックス線写真(別冊No. 10A)と心電図(別冊No. 10B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 心房中隔欠損症
- b 心室中隔欠損症
- c 肺動脈弁狭窄症
- d 動脈管開存症
- e 大動脈縮窄症

別冊
No. 10 写真A、図B

19 4か月の乳児。頻呼吸と体重増加不良とのため来院した。左前胸部に収縮期雜音が聴取され、心胸郭比68%である。心電図(別冊No. 11A)と四腔断面心エコー図(別冊No. 11B)とを別に示す。

この疾患に伴う心血管病変はどれか。

- (1) 心房中隔欠損
 - (2) 房室弁閉鎖不全
 - (3) 心室中隔欠損
 - (4) 右室流出路狭窄
 - (5) 体肺動脈短絡
- a (1)、(2)、(3)
 - b (1)、(2)、(5)
 - c (1)、(4)、(5)
 - d (2)、(3)、(4)
 - e (3)、(4)、(5)

別冊
No. 11 図A、B

20 55歳の男性。胸痛を主訴に来院した。1年前から、階段や坂道で胸部圧迫感があった。その後、前胸部痛が出現し、最近平地を少し歩いただけでも症状が出現するようになった。安静により症状はすぐに軽快する。心電図(別冊No. 12A)と左冠動脈造影写真(別冊No. 12B)とを別に示す。

この患者で正しいのはどれか。

- (1) 安定型労作性狭心症である。
 - (2) 高度の冠動脈硬化性病変を有する。
 - (3) 陳旧性下壁梗塞が存在する。
 - (4) 貫壁性前壁梗塞が存在する。
 - (5) β 受容体遮断薬の適応はない。
- a (1)、(2)
 - b (1)、(5)
 - c (2)、(3)
 - d (3)、(4)
 - e (4)、(5)

別冊
No. 12 図A、写真B

21 1歳8か月の女児。発熱を主訴に来院した。周産期に異常はなく、精神運動発達も正常である。6日前から38.5~39°Cの発熱があり、近医で抗菌薬を投与されたが解熱しなかった。血液所見：赤沈53mm/1時間、赤血球452万、Hb13.2g/dl、Ht39%、白血球16,400(好中球76%、好酸球2%、単球5%、リンパ球17%)、血小板53万。顔面、眼球および右手の写真(別冊No. 13A、B、C)を別に示す。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 鼻出血
- b 喘鳴
- c 腹部膨満
- d 血尿
- e リンパ節腫脹

別冊
No. 13 写真A、B、C

22 60歳の男性。人間ドックの上部消化管造影で食道の異常を指摘され来院した。
食道内視鏡写真(別冊No. 14A)と病変部生検組織 H-E 染色標本(別冊No. 14B)と
を別に示す。

診断はどれか。

- a 食道憩室炎
- b 逆流性食道炎
- c Barrett 食道
- d 食道平滑筋腫
- e 食道癌

別冊
No. 14 写真A、B

23 48歳の女性。健康診断で十二指腸に異常を指摘され来院した。3か月前から上腹部痛と腹部膨満感とが時々出現した。腹部身体所見で異常を認めない。上部消化管造影写真(別冊No. 15)を別に示す。

この疾患で誤っているのはどれか。

- a 十二指腸下行脚内側に多く発生する。
- b 真性はまれである。
- c 後天性が多い。
- d 牽引性が多い。
- e 黄疸を合併すれば手術適応となる。

別冊
No. 15 写真

24 40歳の女性。健康診断で便潜血反応陽性を指摘され来院した。大腸内視鏡検査で粘膜病変を認める。その病変部生検組織 H-E 染色標本(別冊No. 16)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 虚血性大腸炎
- b 大腸結核
- c 潰瘍性大腸炎
- d Crohn 病
- e Behçet 病

別冊
No. 16 写真

25 生後22時間の男の新生児。在胎39週2日、経腔分娩で出生した。出生体重3,200g。生後12時間から嘔吐がみられ、次第に腹部膨満が著明となった。尿に胎便の混入を認める。肛門部に鉛マーカーを置いた倒立位エックス線単純写真(別冊No. 17)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- (1) 母体に羊水過多を認める。
- (2) 病型は低位である。
- (3) 直腸盲端と尿路とに瘻孔が存在する。
- (4) 他臓器の奇形を合併することが多い。
- (5) 直ちに根治術を行う。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 17 写真

26 45歳の女性。会社の健康診断で2年連続して肝機能障害を指摘され、精査のため来院した。腹部身体所見に異常はなく、肝も触知しない。飲酒はしない。本年の健康診断での血清生化学所見：GPT 67単位(基準35以下)、 γ -GTP 35単位(基準8～50)、アルカリホスファターゼ 200単位(基準260以下)。

診断に必要な検査はどれか。

- (1) IgM-HAV 抗体
- (2) HBs 抗原
- (3) HCV 抗体
- (4) 抗核抗体
- (5) 抗ミトコンドリア抗体

a (1)、(2)、(3)
d (2)、(3)、(4)

b (1)、(2)、(5)
e (3)、(4)、(5)

c (1)、(4)、(5)

27 44歳の女性。上腹部不快感を主訴に来院した。心窓部に肝を1cm触知する。血液所見：赤血球350万、Hb 10.0 g/dl、白血球4,400。血清生化学所見：GOT 38単位(基準40以下)、GPT 32単位(基準35以下)、 γ -GTP 48単位(基準8～50)。 AFP 18 ng/ml(基準20以下)、CEA 4 ng/ml(基準5以下)、CA19-9 25 U/ml(基準37以下)。腹部ダイナミックCT(別冊No. 18 A、B、C)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 肝囊胞
- b 海綿状血管腫
- c 肝細胞癌
- d 胆管細胞癌
- e 転移性肝癌

別冊

No. 18 写真A、B、C

28 20歳の男性。上腹部痛があり、近医での超音波検査で胆道系の異常を指摘されて来院した。腹部身体所見で腫瘍を触知しない。ERCP(別冊No. 19 A)と腹部造影 CT(別冊No. 19 B)とを別に示す。

認められる所見はどれか。

- (1) 膵管の拡張
 - (2) 膵嚢胞
 - (3) 總胆管の拡張
 - (4) 胆管と胰管との合流異常
 - (5) 胰石
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊

No. 19 写真A、B

29 51歳の女性。最近胸やけがひどくなり来院した。3年前から水様性下痢、腹痛および嘔吐がみられるようになった。身長153cm、体重58kg。脈拍62分、整。 血圧114/76mmHg。眼球結膜に黄疸を認めない。腹部身体所見で腸雜音の亢進と臍上部の圧痛とを認める。十二指腸下行脚の内視鏡写真(別冊No. 20)を別に示す。

診断確定に必要な検査はどれか。

- (1) 基礎胃酸分泌量測定
 - (2) Meltzer-Lyon法による胆汁量測定
 - (3) 血中VIP測定
 - (4) 血中グルカゴン測定
 - (5) 血中ガストリン測定
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊

No. 20 写真

30 70歳の男性。3か月前から心窓部と背部とに鈍痛があり来院した。4か月で5kgの体重減少がある。腹部と背部との身体所見に異常を認めない。ERCP(別冊No. 21)を別に示す。

この疾患の診断に有用な腫瘍マーカーはどれか。

- a AFP
- b PIVKA-II
- c CA19-9
- d CA125
- e NSE

別冊

No. 21 写 真

31 75歳の女性。腹痛と恶心・嘔吐とを主訴に来院した。脈拍88/分、整。血圧124/62mmHg。意識は清明。腹部は膨隆し手術瘢痕を右下腹部に認める。血液所見：赤血球401万、Hb 12.6 g/dl、白血球9,000。血清生化学所見：アルブミン3.8 g/dl、尿素窒素36 mg/dl、クレアチニン1.4 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、GOT 40 単位(基準40以下)、GPT 45 単位(基準35以下)、Na 138 mEq/l、K 3.1 mEq/l。CRP 1.0 mg/dl(基準0.3以下)。来院時の腹部立位単純エックス線正面写真(別冊No. 22)を別に示す。

適切な治療法はどれか。

- a 抗コリン薬投与
- b 麻薬投与
- c 副腎皮質ステロイド薬大量投与
- d 輸 血
- e ロングチューブによる腸内容の吸引排除

別冊

No. 22 写 真

32 65歳の女性。坂道での動悸と息切れとを主訴に来院した。3か月前から家族に顔色不良を指摘されていた。1か月前から主訴を自覚はじめ、徐々に悪化した。脈拍96/分、整。血圧134/64 mmHg。表在リンパ節腫大はない。腹部で左肋骨弓下に脾を2cm触知する。血液所見：赤沈123 mm/1時間、赤血球145万、Hb 6.6 g/dl、Ht 20%、MCV 138 μm^3 、網赤血球230%、白血球8,900、血小板36万。血清生化学所見：総ビリルビン2.7 mg/dl、間接ビリルビン1.9 mg/dl、GOT 50 単位(基準40以下)、GPT 32 単位(基準35以下)、LDH 650 単位(基準175～353)、ハプトグロビン10 mg/dl以下(基準19～170)。直接Coombs試験陽性、寒冷凝集反応32倍(基準128以下)。

適切な治療法はどれか。

- a 副腎皮質ステロイド薬投与
- b 蛋白同化ステロイド薬投与
- c シクロスボリン投与
- d アザチオプリン投与
- e 摘脾術

33 29歳の男性。発熱と全身倦怠感を訴えて来院した。体温 37.8 ℃。四肢に紫斑の散在を認める。リンパ節腫脹はなく、肝と脾とを触知しない。血液所見：赤血球 203 万、Hb 6.5 g/dl、Ht 20 %、白血球 16,300、血小板 1.3 万。骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 23)を別に示す。

診断はどれか。

- a 伝染性单核(球)症
- b 成人T細胞白血病
- c 急性リンパ性白血病
- d 急性骨髓性白血病
- e 慢性骨髓性白血病

別冊
No. 23 写真

34 68歳の女性。20年前から躯幹と四肢とに大小の皮疹が散在性に多発し、次第に硬く触れるようになり、最近一部が隆起してきたため来院した。時々瘙痒がある以外には自覚症状はない。背部の写真(別冊No. 24A)と生検組織 H-E 染色標本(別冊No. 24B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 貨幣状湿疹
- b 乾癬
- c 扁平苔癬
- d 皮膚T細胞リンパ腫
- e スポロトリコシス

別冊
No. 24 写真A、B

35 15歳の女子。上気道炎罹患後 10日目からの全身倦怠感を主訴に来院した。血圧 148/92 mmHg。扁桃の肥大を認める。尿所見：蛋白 2+、潜血 2+、沈渣に赤血球 20～30/1 視野、赤血球円柱 1～5/1 視野。血清生化学所見：総蛋白 7.2 g/dl、アルブミン 4.1 g/dl、クレアチニン 0.7 mg/dl。

診断のために必要な検査項目はどれか。

- (1) ASO
- (2) IgA
- (3) 抗好中球細胞質抗体
- (4) 抗糸球体基底膜抗体
- (5) 血清補体値

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

36 70歳の男性。数日前から尿量の減少に気付いていたが、昨夜から排尿を認めず来院した。4年前に直腸癌で低位前方切除術を受けた。最近行った腹部超音波検査で多発性肝転移を指摘された。胸部打聴診上異常を認めず、腹部は平坦である。両足背と下腿とに浮腫を認める。血清生化学所見：総蛋白 6.0 g/dl、尿素窒素 68 mg/dl、クレアチニン 5.8 mg/dl、Na 138 mEq/l、K 5.2 mEq/l。CEA 18 ng/ml(基準 5 以下)。腹部単純 CT(別冊No. 25)を別に示す。

最も適切な処置はどれか。

- a 利尿薬投与
- b イオン交換樹脂製剤投与
- c 膀胱留置カテーテル
- d 経皮的腎瘻造設
- e 血液透析

別冊
No. 25 写真

37 1歳の男児。39℃の発熱と、おむつに膿が付着しているのに気付き来院した。5か月前に39℃台の発熱が3日間持続し、近医で感冒の診断で治療を受けたことがある。尿所見：蛋白1+、沈渣に赤血球5～8/1視野、白血球30～50/1視野。血液所見：赤血球430万、Hb 12.3 g/dl、Ht 38%、白血球9,200。血清生化学所見：尿素窒素10 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl。排尿時膀胱造影写真(別冊No. 26)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 腎臓瘍
- b 馬蹄鉄腎
- c 尿管膀胱外開口
- d 膀胱尿管逆流
- e 精巣炎

別冊
No. 26 写 真

38 62歳の男性。会社の健康診断の腹部超音波写真で右腎に異常を指摘されて来院した。腹部超音波写真(別冊No. 27A)、腹部単純CT(別冊No. 27B)および造影CT(別冊No. 27C)を別に示す。

適応となる処置はどれか。

- a 経過観察
- b 穿刺吸引
- c 経皮的腎動脈塞栓術
- d 化学療法
- e 腎部分切除術

別冊
No. 27. 写真A、B、C

39 75歳の男性。右下肢の激痛のため歩行不能となり来院した。2年前に右大腿骨頸部骨折のため骨接合術を受けた。1年前から夜間頻尿があり、排尿困難も自覚していた。骨盤部単純エックス線写真(別冊No. 28)を別に示す。

診断に有用な腫瘍マーカーはどれか。

- a AFP
- b CA19-9
- c CEA
- d hCG- β
- e PA<PSA>

別冊
No. 28 写 真

40 26歳の女性。3年間の不妊を訴えて来院した。内診では子宮は正常大であるが、超音波検査で子宮内膜の肥厚がみられ、内膜搔爬組織診で子宮内膜異型増殖症と診断された。

この患者に適切な治療法はどれか。

- a エストロゲン補充療法
- b 黄体ホルモン療法
- c メトトレキサート投与
- d シスプラチニン投与
- e 単純子宮全摘出術

41 63歳の女性。2か月前からの不正性器出血、体重減少および下腹部のしこりを訴え来院した。初診時、貧血はなく、内診では手拳大の子宮を触れ、付属器には異常を認めない。子宮腫瘍の診断で摘出手術を行った。摘出臓器の剖面写真(別冊No. 29A)とH-E染色標本(別冊No. 29B)とを別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 超音波検査で子宮筋腫と鑑別できる。
- b CA125が上昇する。
- c 上皮性の子宮腫瘍である。
- d 血行性に転移する。
- e 術後に放射線治療が有効である。

別冊
No. 29 写真A、B

42 14歳の女子。4か月前から毎月ほぼ同時期に腹部膨満感と下腹部痛とが出現し、次第に増強するので来院した。初経は発来していない。恥骨上6cmに達する腫瘍を触知する。乳房や陰毛の発育は正常である。

この患者に適切なのはどれか。

- (1) 外陰視診
 - (2) 超音波検査
 - (3) 染色体検査
 - (4) LHRH試験
 - (5) 経腹壁腫瘍内容穿刺
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

43 12歳の男児。発熱と咽頭痛とを主訴に来院した。急性咽頭炎と診断された。血圧104/68mmHg。来院時尿所見：蛋白1+、沈渣に赤血球1～2/1视野、白血球1～2/1视野。翌日には解熱し、症状も軽快した。その時再検した尿所見：蛋白2+、沈渣に赤血球1/数视野、白血球1～2/1视野。血液所見：赤沈6mm/1時間。血清生化学所見：総蛋白7.0g/dl、アルブミン4.5g/dl、尿素窒素12mg/dl、クレアチニン0.5mg/dl、総コレステロール150mg/dl。血清補体値正常。

今後の方針として適切なのはどれか。

- (1) 蛋白制限食を勧める。
 - (2) 入院を勧める。
 - (3) 早朝第1尿を検査する。
 - (4) 前弯負荷前後の検尿をする。
 - (5) 腎生検を予約する。
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

44 65歳の男性。昨日左眼の前が突然真っ暗になり、1時間ほどで回復したが心配になり来院した。5年前から高血圧症と糖尿病との治療を受けている。半年前から右手に持っている箸を落したり、ろれつが回りにくくなるなどの一過性の症状に気付いていたが放置していた。神経学的に異常所見を認めない。

最も可能性の高いのはどれか。

- a 左鎖骨下動脈の狭窄
- b 左椎骨動脈起始部の狭窄
- c 左内頸動脈起始部の狭窄
- d 左中大脳動脈起始部の狭窄
- e もやもや病

45 8歳の女兒。疲れやすいため母親に連れられ来院した。2年前から低身長、頻回の嘔吐および運動後の激しい疲れに気付いていた。2か月前に右半身のけいれんが2回あり、けいれん後に一過性の視力障害があった。母親も低身長であり、糖尿病の治療を受けている。来院時、全身の骨格筋にやせと脱力があり、軽度の難聴を認める。血清生化学所見：GOT 65 単位(基準 40 以下)、GPT 50 単位(基準 35 以下)、CK 200 単位(基準 10 ~ 40)、乳酸 47 mg/dl(基準 5 ~ 20)。

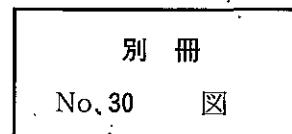
診断はどれか。

- a 多発性硬化症
- b ミトコンドリア脳筋症
- c 筋ジストロフィー
- d 結節性硬化症
- e 脳腫瘍

46 7か月の男児。笑わなくなったことに気付かれ来院した。20日前から親の顔を追視せず、声をかけても笑わなくなった。このころから、物音にびっくりしたよう瞬間に両上肢を振り上げる動作があるという。これを数回反復する。診察所見は追視がなく、お座りができない。昨日近医で記録した覚醒時脳波(別冊No. 30)を別に示す。

最も適切な対応はどれか。

- a 1か月経過観察する。
- b 早急に薬物治療を開始する。
- c 聴力検査をする。
- d 視覚誘発電位をとる。
- e 睡眠時脳波を検査する。



47 2歳の男児。低身長を主訴に来院した。四肢短縮型の低身長を呈し、頭部が大きく前頭部が突出している。内反肘、太く短い手指および胸腰椎移行部の亀背を認める。知能は正常である。

この病態にみられるのはどれか。

- (1) 鎮骨低形成
 - (2) 多発性骨折
 - (3) 内反膝
 - (4) 脊柱管狭窄
 - (5) 成長軟骨板拡大
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

48 12歳の男児。午後11時に右下腿の激痛を訴え来院した。当日午後3時に野球試合中に右下腿骨を骨折し、徒手整復と大腿以下のギプス固定とを受けていた。ギプスを分割すると下腿の腫脹が著明で、下腿前外側部の激痛のため足関節の運動が不能である。エックス線単純写真上、骨折による側方転位は10 mmである。前脛骨筋の筋内圧は著明な上昇を認める。

直ちに行うべき処置はどれか。

- a 再ギプス固定
- b 徒手整復
- c 直達牽引
- d 筋膜減張切開
- e 観血的整復固定

49 10歳の男児。数日前からの意識障害のため来院した。Fallot 四徴症がある。傾眠状態で、項部硬直、不全四肢麻痺、四肢腱反射亢進および Babinski 徴候を認める。頭部 MRI の T₁ 強調像(別冊No. 31 A)と造影 T₁ 強調像(別冊No. 31 B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 膜芽腫
- b 転移性脳腫瘍
- c 脳出血
- d 脳梗塞
- e 脳膜瘍

別冊
No. 31 写真A、B

50 29歳の女性。易疲労感を主訴に来院した。2年前の出産時に大量出血があり 4,000 ml の輸血を受けた。1年前から疲れやすくなり、寒がりと食欲低下とを自覚するようになった。分娩後無月経となっている。血清の free T₄ 0.5 ng/dl(基準 0.8 ~ 2.2)、コルチゾール 2.3 µg/dl(基準 5.2 ~ 12.6)、エストラジオール 12 pg/ml(基準 25 ~ 75)。

予測される検査所見はどれか。

- a TRH 試験で GH が増加する。
- b TRH 試験で PRL が増加する。
- c CRH 試験で ACTH が増加しない。
- d LHRH 試験で LH が増加する。
- e 高張食塩水負荷試験で ADH が増加しない。

51 52歳の男性。顔面から首にかけて発作性の皮膚紅潮をきたすため来院した。数か月前から発作が生じるようになり、次第に回数が増加してきた。発作は5分ほど持続し、しばしば腹痛と水様性下痢とを伴う。身長 167 cm、体重 65 kg。脈拍 68 /分、整。血圧 130/70 mmHg。血清 free T₄ 1.2 ng/dl(基準 0.8 ~ 2.2)、血清 コルチゾール 8.1 µg/dl(基準 5.2 ~ 12.6)。尿中 17-OHCS 5.2 mg/日(基準 3 ~ 8)、尿中アドレナリン 10 µg/日(基準 1 ~ 23)。腹部 CT では異常所見はなく、小腸造影で径 2 cm の腫瘍陰影が認められた。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 尿中 17-KS 測定
- b 尿中セロトニン代謝産物測定
- c 尿中 VMA 測定
- d ⁶⁷Ga-シンチグラフィ
- e ¹³¹I-アドステロールシンチグラフィ

52 51歳の男性。健康診断で高血圧を指摘されて来院した。毎晩、ビール 3 本を飲んでいる。身長 158 cm、体重 62 kg。血圧 168/100 mmHg。血清生化学所見：空腹時血糖 142 mg/dl、尿酸 9.1 mg/dl、総コレステロール 208 mg/dl、トリグリセライド 220 mg/dl(基準 50 ~ 130)。

適切でない治療法はどれか。

- a 摂取エネルギー制限
- b アルコール摂取制限
- c 食塩摂取制限
- d アロプリノール投与
- e サイアザイド系降圧利尿薬投与

53 48歳の女性。近医で肝機能異常を指摘されたため来院した。数年前から眼がゴロゴロし、口が乾き虫歯が増えたことに気付いている。眼球結膜は充血し、舌乳頭の萎縮と多数のう歯とを認める。血液所見：赤血球 392万、白血球 3,800、血小板 18万。血清生化学所見：総蛋白 7.6 g/dl、アルブミン 3.0 g/dl、IgA 380 mg/dl(基準 110～410)、IgG 3,220 mg/dl(基準 960～1,960)、IgM 460 mg/dl(基準 65～350)、総ビリルビン 0.6 mg/dl、GOT 96 単位(基準 40 以下)、GPT 88 単位(基準 35 以下)、アルカリホスファターゼ 512 単位(基準 260 以下)、 γ -GTP 120 単位(基準 8～50)。抗核抗体 160 倍(基準 20 以下)。

この患者で高値を示すのはどれか。

- (1) 抗 dsDNA 抗体価
 - (2) 抗ミトコンドリア抗体価
 - (3) 抗 SS-B 抗体価
 - (4) 抗 Jo-1 抗体価
 - (5) 抗 Scl-70 抗体価
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

54 10歳の男児。転びやすいことを主訴に来院した。周産期に異常はなく、成長発達は正常である。三種混合ワクチン、ポリオワクチン及びBCGは接種済みである。2歳時麻疹に、3歳時水痘に罹患した。2か月前から授業について行けなくなり、学業成績が低下した。また、ささいなことに腹を立てたり、自室に閉じこもるようになった。5日前にインフルエンザ様症状があった。2、3日前からは上肢のミオクローヌスが頻回に出現した。胸腹部に異常を認めない。神経学的には中等度の知能低下、四肢腱反射亢進およびミオクローヌスを認める。脳波に6～10秒に1回の高振幅徐波バーストを認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 脳性麻痺
- b Leigh 症候群
- c Reye 症候群
- d 単純ヘルペス脳炎
- e 亜急性硬化性全脳炎

55 28歳の初妊婦。妊娠初期の検査でヒト免疫不全ウイルス(HIV)の感染が確認された。その他の感染症は陰性であり、妊娠経過は正常である。

正しいのはどれか。

- (1) 本人の同意を得て夫に告知する。
- (2) 感染妊婦の児では垂直感染率が高い。
- (3) 垂直感染は経産道のみで成立する。
- (4) 性交は避ける。
- (5) 授乳は避ける。

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

56 67歳の男性。胃潰瘍の診断でヒスタミンH₂受容体拮抗薬の投与中に胃癌の診断がなされ、幽門側胃切除術が施行された。術後5日目から頻回の水様性下痢が出現した。便の細菌培養検査からMRSAが検出されたので、感受性のある抗菌薬の投与を開始した。血液所見：赤血球 550万、Hb 15.0 g/dl、Ht 52%、白血球 13,600。血清生化学所見：総蛋白 6.5 g/dl、尿素窒素 38 mg/dl、クレアチニン 1.3 mg/dl、Na 145 mEq/l、K 4.8 mEq/l。CRP 6.2 mg/dl(基準 0.3 以下)。

更に行うべき処置はどれか。

- a 蛋白分解酵素阻害薬投与
- b ヒスタミンH₂受容体拮抗薬の再投与
- c 大量の輸液
- d ロングチューブ挿入
- e 腸切除

57 76歳の男性。微熱と全身倦怠感とが続くため来院した。2か月前に経尿道的前立腺切除術を受けている。心尖部に最強点をもつ3/6度の汎収縮期雜音を聴取する。血液所見：赤沈50mm/1時間、白血球12,500(桿状核好中球10%、分葉核好中球66%、好酸球2%、単球4%、リンパ球18%)。CRP12.6mg/dl(基準0.3以下)。

血液培養で予想される起炎菌はどれか。

- a *Streptococcus pyogenes*
- b *Streptococcus pneumoniae*
- c *Enterococcus faecalis*
- d *Klebsiella pneumoniae*
- e *Pseudomonas aeruginosa*

58 52歳の男性。会社の健康診断で胸部エックス線検査を受け、異常を指摘されて来院した。自覚症状は特にない。胸部エックス線写真(別冊No.32A)、経気管支肺生検組織PAS及びGrocott染色標本(別冊No.32B、C)を別に示す。

適切な治療薬はどれか。

- a イソニアジド
- b アンホテリシンB
- c テトラサイクリン
- d メトロニダゾール
- e ペンタミジン

別冊
No.32 写真A、B、C

59 13歳の男子。排便時に虫体を排出し持参した。自覚症状はない。虫体の模式図(別冊No.33A、B)を別に示す。

推定される原因食品はどれか。

- a サケ
- b コイ
- c 無農薬野菜
- d 牛肉
- e 鶏肉

別冊
No.33 図A、B

60 40歳の女性。夫婦げんかの末、発作的にメチルアルコールを飲み、15分後に救急車で来院した。やや興奮しているが意識は清明である。呼吸数24/分。血圧130/78mmHg。

まず行うべき処置はどれか。

- a 心電図モニター
- b 胸部エックス線単純撮影
- c 胃洗浄
- d ジアゼパム静注
- e マニトール静注

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)